

2021. 11. 7. 主日礼拝説教
聖書：テモテへの手紙一 6章 11-16 節
『永遠の命を手に入れなさい』

召天者記念礼拝を迎えました。今朝は単なる年中行事ということではなく、教会が主体となって信仰の先達と愛する者の死を体験したご遺族に慰めを祈るためにわたしたちはそれぞれの場よりここに集められたのです。

ひとつの詩を紹介します。いささか昔の話になりますが、これは島村亀鶴という牧師が 1947 年に、長男に続いて長女ハンナさんを慢性的な栄養失調に端を発する結核のため 11 歳で亡くされたその半年後に書かれた詩のひとつです。

「そは天使なりしか」

国窮し、家窮したる戦後
後樂園に落葉を拾いにゆく
風呂敷につつみて
枯枝背負いたる
そは天使なるかな

貧しけれども朝な夕なの祈りして
相むつみたる
食卓のその一人
そは天使なりしか

算術は不出来
読み書きも、のろかりし
復習を強いられては涙ぐみしもの
そは天使なりしか

玩具、お土産いただきでは
すぐお友達にくれてしまい
お使いにゆくのが好きなりもの
そは天使なりしか

愚かなる父の、説教に苦心しつつ
想ならざるとき
「お祈りなさい お父ちゃん」と
天よりしずかにささやくもの
そは天使なるかな

愛する者の死とは、一体どういうことなのでしょう。ただ共通して言えることは、その愛する者の失いはわたしたちの心に他の何ものを以てしても埋め合わせることの出来ない虚ろな間隙を形作るということなのです。時の経過がすべてを癒すというようなまことしやかな物言いもありますが、決してそんなことはありません。いつになっても厳として慰められぬ想いは拭いきれません。愛する者との睦み合いはそれほどまでに深いものなのです。

著者はテモテへの牧会書簡の中で、このような孤独と寂しさに閉ざされる現実の中に生きる、おそらく自らの良き理解者としての教師テモテに勧告をします。それは他の書簡に見受けられるような神学的教育内容や裁定というよりも、同労者への慈愛といたわりに満ちた勧めとして語られます。そこには努力や研鑽における成果がきらびやかに語られるのではなく、ただ自分が愛されている存在であることへの回帰こそが「永遠の命」を得る入り口であることが語られます。言葉を尽くして言うならば、愛することはたとえ放棄出来ても、愛されることは決して放棄出来ないということなのです。愛する者とは誰なのでしょう。それはこの「わたし」を無条件で愛してくれる者なのです。わたしたちは愛されていたからこそ愛することが許されたのです。

著者は、永遠の命を手に入れるために価なくしてわたしたちを受け入れられるキリスト・イエスに言及します。

それは愛する者を亡くした孤独や寂しさへの解決ではなく、愛する者に愛されたことを知っている者は、孤独や寂しさを引きづったままであっても、また、そして何度でも、愛し愛される関係性の中に踏み出して行くのです。それが生きること飽くなき慰めであり、永遠の命を生きることなのです。